

911.3
ウ

漢書

志由道人撰



浦仙傳

門人

仙臺室峰下百舌
盛岡山田浦卓堂校

鳳雛鷄之郡世以蘭菊為雜世以
信天公志由名德角此以より
乃凡會散衆產と或世以常
下之方およそに雛を玩と嬉ふ長
及て其例益長一也懋に西
塵徑よつらひさをもて世俗
袒得禱群引朝れを柳下惠
詠と歌て笑天世以除痴と東鼻

真逆人正徳の才、然るに社中
誰のやなるおあはし、幾程なく教
十部、たは倍と進て、高巴よ、風靡
す、おまを、日進、と、諸君の、何と、ま
に、後、た、の、盛、を、ま、に、後、の、ま、を、
弟、子、教、は、此、を、ま、に、後、の、ま、を、
よ、ま、に、後、の、ま、を、ま、に、後、の、ま、を、
人、難、し、曰、唯、の、呼、は、才、を、抱、て、何、を

胸、懐、か、た、ん、や、と、都、方、に、後、に、機、を、
由、笑、る、る、を、人、唯、を、母、を、指、さ、し、を、
一、ふ、る、ま、を、と、に、ま、す、よ、あ、る、ぬ、且、好、て、出、水、を、探、
り、後、傑、を、と、語、の、胸、の、志、の、は、何、と、ま、に、
無、名、に、後、に、境、に、後、の、才、を、ま、に、後、の、ま、を、
を、宗、と、す、ま、し、ま、の、胸、を、抑、以、集、乃、
ち、お、ま、に、ま、せ、た、お、此、浦、傳、は、せ、し、
し、お、お、色、を、ら、み、お、お、の、佳、章、中、に、

收るあはりの人百十世阜堂の西士乞
 了是しなほす言す言す幽靡を高
 うのそとほりて需ひふらふ山より獸小土
 の身をも人よあはれとてさる由年未
 士よなきひしりしり月仰るあはれ
 流乃交ふもも敬辭せは自由あ
 出郡の報は亦てあゆ子の志を併
 どもさる

無替山津花落被髪道人識

浦つゝ日記

士由

不老河乃里小歩行郊外告子... 男ありてそとち
 秋やちる花の... かの... 年くひりわらうぬ
 ち... 古勇向河乃... あひぬより須磨... かの...
 并せらふまぬ... ちめ... ち... けれ
 七月... 中に... 知已社裡乃... 浦つゝ... 終因
 西りの... 痕... 世... の勝境を探... 被髪... あり... の
 西若小をも春く... かに... 文化西の... 八日... 枕肩...
 ... かに... 心... 雀... 具... あり... 花...
 七曲りて... 二十... 歩... 此記の中... 都て... の九折... 行... 花... 只... 身...
 ... 古の... ち...

てあはれ居るにけ人多情却不如無情と枕辺少かづけすと
春すもよそゆりきぬこ一樹一河の因縁之場と断ちてひ
なるとさうして手紙の旧交よみ三日おむつとさうさの情思はとて
あつんともすささしむるに平しくゆつひて寂しきぬもく
と久うらひつゝ嫉み合つんとせめて此ちうく居るやう
はくは小輕米喬齊子お真に着まゝも富うふとせしむ世
情ふ通しせらふも金の言を願せしむ

廿六日雨より日守うし旭暎樓小やうとまて對酌と樓上より
物さうとくに魚わつゝ窓妓とあつ舟も掌小まて弄さるるしめ

二十七日夕に被衆子社裡求友あゆの五六車賑ひして御崎の跡

小諸の舟中の涼風佳遊のやうにさうさ

綱つげさる思さるるちあまきあまゆ

賽小滝沢のあゆみ船とよかき多半藤葉あつたつ秋おせ

二十八日大槌のさるるさう促秋の佳きあつ小舟あつるさる

坂小原坂の嶺すの里とゆつて東橋社裡柳下窓お難とさる

まゝ小室の又木見由たてわち杉石乃社裡あつてさる窓の窓名

ちりおしまるらんや去年お西遊小周防の岡玖賀邑あつて病死

志ぬとさる石墮涙お碑のし存せり懐旧乃情志おひくさきてり

祖父の一笑におちるあつちや
廿九日三雄白眉鳳眉とさるあぢ社裡つゝひあつ裏席と

ひらひとてりてちかきる山東神社の祖暗き先太兄の荒蕪の地とひら
 き宰府より菅神と勧誘ししまうし一河と燕具はき人々
 とし白歳常徳福法強ては五高勝る也弥法勝の三豊六推人
しし余の思入ちりのくく石井云然史山名福の門人桂庭の兄
やて玄福、医、師つるあに傳傳して珊瑚を山ちり所山とこのる山やすお駱
 客を南面さるをさそまも賞しむるも所みでこもあさる仙境ちり
 天女祠の傍小大童とまきし龍觸し祝示ひすしきと向しと人
 松をう給おほうて日く神くふる

三月朔小川雀ぬ之西移坐ちあつふこのの野と音河史明の云

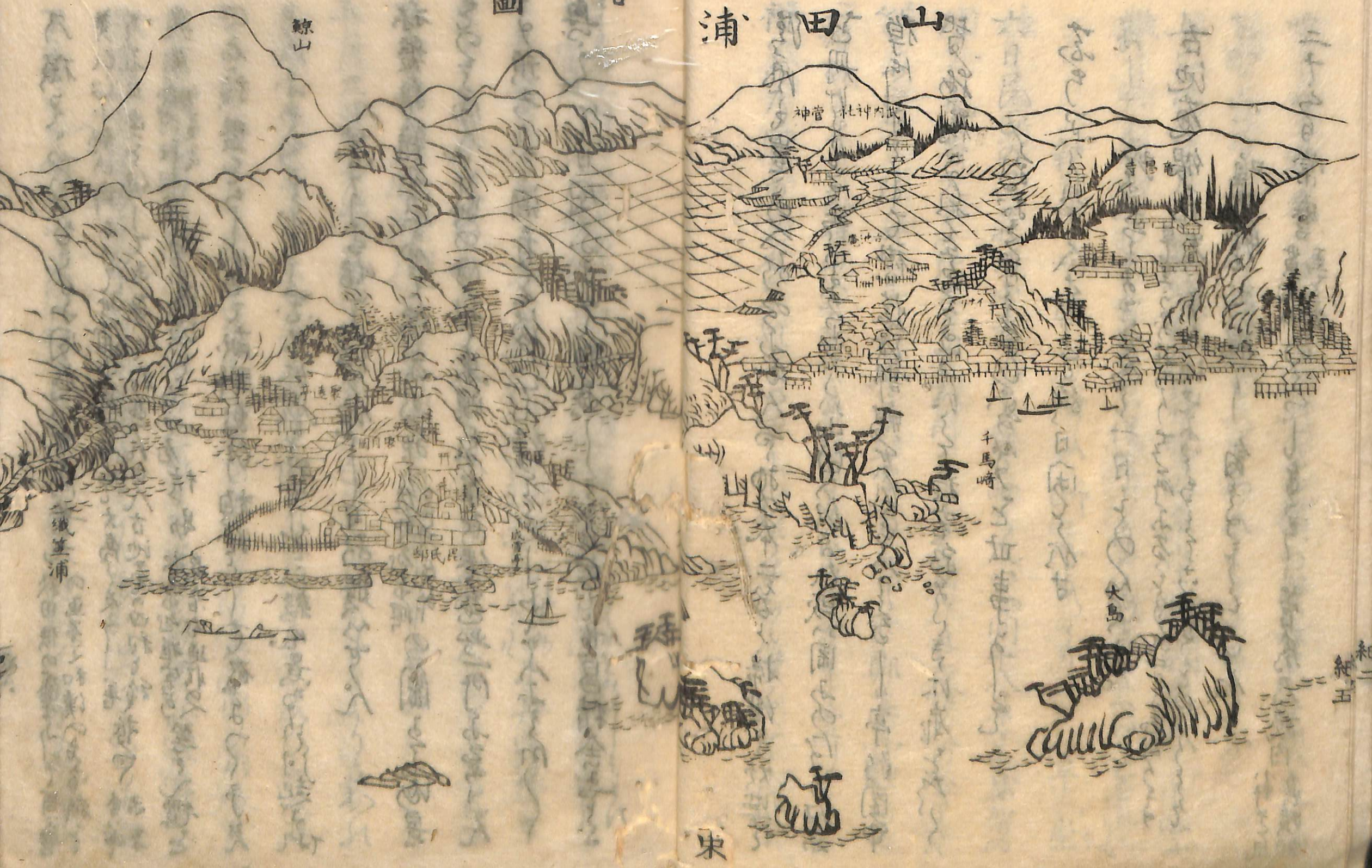
勢乃の多雅客をけたひ中より所ちりやとひとてすしん
 二日のくけりてあしと移し連歩は男も雇りし山田のちへ
 赴く此る四十八坂とや皆破山の祐つふてをさかぬとす不
 流とすしけていりめてと浦結し吉里と波板舟越ちひさ之教
 わいし棟くししれぬ小宗ちりまてあをて漁をるやすす
 のとけしや新外女あしと海と師の馬

織笠の浦山田より三浦玄高子名清字得一と聚遠亭山室るり

弱冠あより東都山名福の塾少為字し経史也通し詩文
 不巧とすし殊よ塾頭あり後浪花して園玉の豪傑不梅
 ちりん老母も事るうしめり此浦ふ塾すむ昔年予を寄合

略圖

山田浦



鯨山

神宮社

龍昌寺

千馬崎

大島

磯並浦

東

紙五

乃極... 秋田侯の藩士にして哥磨の魚子と和漢のちり狐と

携ひは小釣の癖ありて此浦小嵐すすやと高くと友と善哲の未子

兵馬武内社相官 伏見氏 能く水酒と白戸を 佐助 松平右推官の 松平右通候之 等々之 禮を

の角核盤をちりて飲酬教外相候して取まつく予免

と人ふちくさふまうて下に成を稱せしと殺風意なり川起され

若うし待候し日新腹ひせん

杯盤狼籍小なる角を稀急の神 佐助を酒 此の神の 園まて海豊

をのち人し馳のほれて東漢系軍に倦おせ所ふまうん

る頭まうて酒有をほくして侍とて一申ふまうん

身ううて日園ふまうてお候しとて音昌精念まう



寺は用水神所其人小ありすして又雅の客と金とてたのしとて

と雁度されと意にありて一日と金重なり履とてしとて

六五日貫洞一啓子大々山 毎天初ありお中弘法大ぬ小舟道達して 糖摩の取もて道もよま

予とててもす妓教ぬ舟中ふあて鼓琴哥舞終日たのちまてあをす

六六日政尚 荒川を假山 の技あり と記び居日園談とて 中志男

五月廿四日お海小楚と新旅まうてお持なりまうり立あれ

と膏うり飲のりまうり特宿借客舟旅なりもあひひり人地

たうりしとてしきとて送とてしふとて者ひりり身空の輝のぬ衣や

香需教とて契ありて武名味とて所とて送とてあ達の嶮不思まの

保護らとて移とてあわいりあてあて是より馬れ口つちうり男少服

アとあそと呵れつとて程とてあまをたて津輕石の白と森合某の

七日市中にちるれあふ新流泉の源と云ふはこれのなり五里
於くさうして溪とていひり大なる巖窟ありつらなり
入ふちみ川ありて流いありこのいさやうなる美あり
極めし入うし偶入るもおも美あり何ありしとて
ち金さのちもあつてさうさうさうと又狸尻の瓊蓋ちの
流にありあつてとて極原の如別世氣あるゆき所なり
九日其所よりわのちと海を極めんとするく例嶮のふ
の途流よりふおちくやい三丁里よりして知子固明神の
十日磯山つていまに子軍よりして阿津賀とて嶮とて
細砂をち換る五里よりして玉川といふ里小なる玉川の

流よりちらまの山谷よりあつて小川後とれあふ入古松
あまのひ小松所よりあせ小竹をりてあつてあつて
午馬あまのいしておちて社とてあつてあつて

千しうりなるあつてあつてあつてあつて

此流よりいへるさうのひの双岩あり二つありて
この流よりいへるさうのひの双岩あり二つありて
かひてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
換りてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
とち人西上人の若跡の後の岡山あり泥障ち人をす
もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

山
の趣
俗の
況
子
母

山田の
早座の
山田

しほ船帆樹るをよみけしは風の起る風をよみしは
さめたふくたにせありとらふもをるま所へ娘をうも
らんとのめ合ふ中よりなるいふい草かてぬをさう
咲かすそちうとらふ昔なつしきうまうとらふ
泣きうとらふいふいふいふいふいふいふいふい
涼風も眠けつてさうとらふいふいふいふいふいふい
えさぬうとらふ駈つけくう予うとらふいふいふいふい
つらうとらふいふいふいふいふいふいふいふいふい
初るの落し初るいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい

まはれとまきまおらうとらふいふいふいふいふいふい
あうとらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
そらんとらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
うとらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
七とらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい

十府の里のからふ野田入里のとらふいふいふいふいふい
さうとらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
所とらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
とらふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい

帰庵の縁窓の底よりふて西を色しの詩をよみたり
あしとて百古の志ありてぞ獨り

詠諧歌一首合椽實贈于東臯士由而逸士被發道人
世とてふ太山の奥の本におまをりてさるのし拾てくさ
十代の錦本塚をよみての輪廻
源豊曆

錦本よみしもおもしろく果のちまひさきりしやみ
田舎使草
仙臺吉郡某也
藤原道弘

人ともてひらき草を庭をせりて好むとておこるもさる人
まき山月
山本任安

おもしろく入るまき山月をてつておこる人おこるに月をぬきておこる

鯉のこころをさるる水
盛岡輪實郡某也
河園春卿

滝津瀬の水上をさるる水はなるとあつたのぼる魚をいひてさ
送士由詞客浪游于四方
鐵嶺海濱妻士
三浦清得一

相逢相別忽愁中行漫話游幾信情藤杖尋花兼
水遠芒鞋踏月與雲輕思因萬卷胸中帙曾嘯千
山路上晴為向自茲行屐有無醉放初吾生

暮秋雜詠
仙台大河原
遊堂

小院眠醒獨倚欄丹楓摧盡野村寒只存屋角牆頭柿
自綴珊瑚三四團

醉命按摩卧畫間家童喚起月高彎就中霽雲偷
篁去剩見屋前新假山

仙府

梅屋

蕉是山家紙有時題我詩夜來風又裂幸免
世人知

遊善之俳諧

左ふたれ和と之に
笑うく此は次子にて

動輒購水以化と教態と消之河經也 董城

野の底をささむたに三月乃空 互答

房子を惜之馴しと宮乃赤に 士由
好筆りくらをいあすお水急 木曾
十んくいと世はたむにほひあはし 互答
「一た乃あかき甚乃好く 目城
悠むく世はたむにほひあはし 谷
子子降し道きくお笑しれ 由
以のうけを眼真乃世茶を茶はて 小倉
のちぬぬ函も井くくよのし 年
情つんりて空を素おん松原畑 城

日 崔山

世の春のちりりしるは 散る花 橋津 長衣
 春の供のちりりしるは 花の春 三浦人
 四五のちりりしるは 花の春 皇漢
 起るる 花の春 春の洞
 春の洞 花の春 二人
 山寺の 花の春 果彦
 秋の 花の春 瑞馬
 一の 花の春 魯德
 小石の 花の春 早彦

花の春のちりりしるは 散る花 月夜
 春の供のちりりしるは 花の春 一カ支 月夜
 四五のちりりしるは 花の春 一七 月夜
 起るる 花の春 一七 月夜
 春の洞 花の春 一七 月夜
 山寺の 花の春 一七 月夜
 秋の 花の春 一七 月夜
 一の 花の春 一七 月夜
 小石の 花の春 一七 月夜

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 10 lines of characters.

源立
其白
為
嶺
牛
叙
表

Handwritten Japanese text in cursive style, consisting of approximately 10 lines of characters.

東
岳
少
同
人
士
秋
年
池

不二虎や雲中の鶴と遊ばぬ
旅歌

山門にふりかへては長し
葛と

まはるや胡弓の上す年
草

吾一掃の筆のてを
果北

君月や海を底を
完未

破社氏と俱に来りな一鳥の多
東子

芥菜畑と一投言
一歳

知年ふもほはるも
一瓢

お別れ遊々との身と空を
嵐夕

浪空に只秋の水
双鳥

まのそむた後しなまに未
牛心

東風吹や河水以ん
諸物

蟬の色流し
可丸

四つ中橋もよむ
一葉

張子のわく事美し
玉村

ゆらりゆら松林の
洗滌

ぬる蟬の羽手物書ん
早布

今八月さても惜
道産

只ひあふ人言死んで米飯の花 下 杉長

雄子もや幸いなる心 カハ 言く

痛くおもしろい カハ 大様

起あつや 下 一 醒

あめ 下 大 芥

山久花 下 雨 降

時 下 桂 丸

宇 下 其 的

宇 下 里 石

嵐 カハ 逸し
 八月 カハ 仙堂
 折 カハ 井 岩
 分 カハ 車 丈
 社 カハ 寧 庵
 金 カハ 莫 心
 初 カハ 尼 春
 空 カハ 幽 嘯
 而 カハ 文 雄

きんぎょのきりふくろのきり
杉 聴

住別をみよふはむせの須の秋
土 芳

引くせを松葉のくさの樹の穴
松 堂

何所をくさの風呂の樹の鳴や脆月
路 右

樹のくさのきりふくろのきり
自由

うさぎのきりふくろのきり
赤 花

麻売の樹根一先をくさのきり
土 泥

今日月をくさのきり
不 玉

きりふくろのきりふくろのきり
暮 亭

朝のきりふくろのきり
月 化

大和路のきりふくろのきり
菊 也

追をくさのきりふくろのきり
秋 風

戸はくさのきりふくろのきり
夢 白

坊をくさのきりふくろのきり
對 外

きりふくろのきりふくろのきり
雅 松

花うせしやかんふら

下中

詠歌

何神の人世引ぬらふら野鳥

つらね

陸奥を隔ちし杉のむ月哉

六六八

長歌

うきじりの馬蹄を踏みしはきあき

三夕

吟鹿の角あきと鹿角の岩所を

天貫

源一と水の歌えんよきり湖

亀子

うきじりやふけは年高き火吹舟

狐二

順ニリ

月あふをこしん春を秋うら

木子

あやしの秋にさきよ 文好

木下トヤ秋のつらき 成雅

秋の時の秋のつらき 清虹

盃の少なきつらき 可来

あやしのつらきつらき 依ひら

源一鳥吹中知り 野松

井切子流や来くる 民見

子一人あき来くる 遠光

葉の若きあき 五明

花の人月あけの隅とあつとて
 是りや釣籠ふとてとむうつと
 山の月大なるなまなりと時面より
 見しとてくや秋の境うさりて
 月詠ふ新酒自くくありとて
 とら時面なきとて秋の心わく
 花の心は月とて子とて
 登も月も空も自くと麻布
 折急け惜とて八年のくれあき
 花石
 琴雨
 子竜
 春莊
 楚山
 谷雄
 院宗
 石路
 露路

月見まゝとて色とて人の月とて
 朝もや寝給う吹華の心
 空の心は嘆惜とてとてとて
 天の月も心は涙とてとての風
 風と後とて年や秋時とて
 花とてや胸の佛とて二人床ん
 花の心は花の心とてとて
 花の色は花を活畫の外とて
 花とて千朝の蔓とて風とて
 花石
 乙因
 路枝
 英里
 律人
 乙松
 律人
 乙松
 元流
 花仙

炭竈十有餘の傍に山あり山 小海

郊外の草平打ちの爲しう都山田 乙海

干し沙の深きさきや旅のり山田 爲奴

所解の甲もよい花もちの秋の音 嘯鳴

海たるくつ塔の影の月ある哉 東河

葦虫ささのさきよきよきありき 桐井

訪士由師之僑居 山月も蘇媛のほろろを

平々々々のりやなると町下かり 爲奴

秋日和田中は所々の磯前より 去調

雪晴む身も来ぬたりて世を嘆 月洞

笑しき都山来しは蓮の風 在入

花明玉粟と乃多しね蛇のま輪で 藍舟

吹く水新根より睡の足踏ん 草堂

仙形額 秋風や鏡を杖ついで駕籠とあは

石保姫の山さかしく戸を時あふふ 鬼子 鬼孫

英一も女もあつたてはるの戸
火名もあつたてはるの城の寺
一得
南山

空も通る橋を食の若を塔し
見もあつたてはるの海り
買月
築居

空も通る橋を食の若を塔し
見もあつたてはるの海り
買月
築居

空も通る橋を食の若を塔し
見もあつたてはるの海り
買月
築居

空も通る橋を食の若を塔し
見もあつたてはるの海り
買月
築居

灯ももせも白髪もはく実もあ
柔ももせも白髪もはく実もあ
時あつたてはるの海り
胸ももせも白髪もはく実もあ
時あつたてはるの海り
三日月もあつたてはるの海り
風ももせも白髪もはく実もあ
思ももせも白髪もはく実もあ
山ももせも白髪もはく実もあ

子存

清如

麻風

如龜

古道

如存

潮丸

根菽

如存

長寒しきと水千石三きうし
 玉露の浮世の沙汰きうしうし
 其業の風は流らうと業色うま
 董暖存城しきくたうり小うり
 町信も隣歩けりやそのその業
 山をうりきあふ神を女命し
 佐屋の東はゆき花より牡丹哉
 満月の生るるしきしき
 池の面もしきしきしき鳥平哉

五英
 少孫

竹あふりしきしきしき運り
 花あふりしきしきしき山
 情けあふりしきしきしき腰
 月のゆきしきしきしき虫の中
 よき人きう回舎きう多しきしき
 水千石を罪なきかたしきしき
 公奥も落も大勢中しきしき
 角力あふりしきしきしき
 高砂山越きう来しきしきしき

湖山
 鬼堂
 千所
 似山
 月共
 曾外
 雪丸
 雲三
 香香

嗚子あゝの谷むい

在仙道江
不令

若の目結暮るるたれら神せり

三醒

蒲云英と事と長そ舟の棹

且

編書あやむと長を故人も来り

二

借書くハ加りも夢ハ望

日人

心梅子後まの又白く酒友も来

山嵩

芦の月梢くそくも花をけり

車真

空しく是淋し小島の筑波山

玄園

沈香のついでに日あり花光飛

志月

不控も難の致るる以時和

琴月

辞世

八

笑の輪くら直く上涼

杯

まろと女を海月も経るる芦の毛

解月

我袖より所を坂城せりか

若里

山茶あやめあひの雲の行り

三鳴

初秋の来てあつりのを水田うそ

保山

茶の香や箴の蝶けり

三保

中新田

若里

三鳴

保山

三保

山形秋のあややしこくと登り附
 笑う同く日々残りも色まろの海
 不ふや流きしとくさるそのの岸
 親くあや甲も秋のあやし海見を
 朝もあやまのせももろかりり流
 鳥の音見の起くやう利しとくさる
 凍鰯の瞬く半北北執りあふ
 松の月を北あふしふえとくさる
 鐘の色まの騒と押しとくし

後 友六
 坪一也 吐牛
 全庵主人 南陽
 後 芙蓉
 東三
 荒園
 同志
 淇升

鳥の毛北ぬりくせを流し水り利
 折りく月あふしとくさる
 宮城野も色まろもあふし中のみ
 木免の片西あふしを時あふし梨
 而きあふしとくさる今も月
 湖の水波溜えあふしとく利
 秋のあふし尾との鐘や盛年し
 息病をあふしとくさる
 雪やそらしとくさる

完里
 梅長
 乙見
 文桂
 東原
 後 碓松
 古久傳 巴調
 一七七 世牛
 圃翠

おきほくや鹿狩りつし表 完車
 月むのきこやけしきさる海 戸汲
 江の西の風はくしきと里水 完車
 うつくしきみらふまふり紫谷り海 方耕
 物の香のあこころなるふふ交の紫 岳庵
 時ふくや粟津と須の懐 熊肩
 梅登む我名呼子さ誰の子さ 百方
 月まのほろき麻ぬらんさるの西 玄魁
 物くらきも只置よふさかろ交 如水

葉のあひまや危前り現き箱 漢州
 蝶鳥の今日も波借き心うさ 里河
 聞到る只の鳥をりあろの馬 氏府
 名月や花のあろなり松の陰 連石
 新釣籠の傍寒し掃花 海翁
 包ぬをぬき心地せんとちのやみ 文哉
 雲の戸や雲の枝持の香う海 其遊
 雲の位渡りしき馬り海 臨水
 七月の命のあろに右辺とを海 士觀

ある赤いせめて一日似よみくは
月夜中そののとももる膝抱え
見つけくもる蝶の鼻色に更を秋
枯れをくくもる侍如我老如
羽の葉おれんことそまはわく飛
花のあふ髪買うの来りる色
あつのおや田中の秋よるの行く
寒きもくぬくひし物を楊柳
む鳥をけけらぬ年とあふくも色

園翠
玉手
天亮
守思
百拳
巢樹
己淳
三富

相中

十一

虫鳴中あつきさうあつ星月ぬ
あつあつあつたき葉の亭定い
暖やあつあつ産さくさくあつあつ
半あつあつ鞍馬を下るるあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつあつ
水底に秋の暮らあつあつあつ
蝶飛やあつあつあつあつあつあつ
草分けあつあつあつあつあつあつ

百拳
天亮
士富
三富
東竜
斗友
南揚
東竜

相中

旅愁の院見せり秋の風
 くのちの宮爲もその様を
 英の二日張るる並木ゆ那
 梅の咲室に似あふるの末
 岳のさや機へるをいひく
 接ぎももはる有せりあつ室
 近ののりやぬすこま駒あま
 夕の蝶ひよきりし罪やるを
 山にわくあはきりし海わく

乙鳥 西舟 翠英 歌之 院市 富泉 百二 不

嘆息の約束をせり山に鳥
 秋のつらさあはれを花の散
 涼風や今も月を木の音を
 掌にあはれ影ありしを小豆
 秋をくたはれあはれを裏の
 岩頂端に月所を木の末
 夕のあはれをこしに紅宇
 坂のき小粒をあはれぬる嫌
 山麓のあはれを峰をくし星の中

羽遊 田之 紋子 秋吏 白雅 素白 皓月 景明 好遊

八月廿四日 山形 あり 仙風
 粟の穂や小持くくらの里使り
 城のさそ批習ふの峰一乃色
 鍋つらふの湯母を保ちまきん
 花をくくあふや白螺のあま鳴
 鳴るあふとふや梅千のひら
 山溪の海士も肩をきき 蘇きく
 送りや鐘鐺貝を来し泊り客
 多うあや宙に涼しを松操
 仙風 二及 青ま ぬしめ 一歩 下之 随馬 去洞 百古

今の中事 志らるる 老きふ不花
 莖をくく子くくや欲く消ふ危
 猿数寄の猿 盆せしらの草
 大庭のくく大走くくく 夕奔
 欠くくく 柳一のきい事
 松梨子の母志くく子くく月あふ
 膝と市くくく 思くく 秋の山
 大の志くく思の附く 歩り柳茂
 野山く 堪りくくく 良や梅のを
 保智守 馬年 梅男 兼天 子葉 松政 亞同 市鴉 有駒

以感也之帰るを西のさき
市
街に花子羽織着せり久遠
古
松枝嘆山寺のつらきさめり
保昌羽衣
秀阿
虎杖の中や小里の酒を
柳坡

京よあけ
新橋のあやめ着る酒二合
柳郎
半輪月暗く三色山吹裂く猿
松柏
湖の蛇人きくもなうりり利
東泉
投あけく早業千とく屋根の秋
如水

身人送りハ慨ハ
東泉
畑買の董七葉と栴
後
右素
蓮織京子美如あつ古の風
日
右明
少くきて黄昏て栴の
日
忠駿
唯
相
思
九りもなしてさび
相
思
秋のつらき
相
思
術の冥も然やる
追
儼
葉
蛭

秋の暮宿を末よかり袖の白い
 雪の心も梅の影も二里ん
 山景もやゆり河寺の酒
 有葉目や也の香もぬ履をいて
 鞠玉もやふくや梅の香も
 私の葉もはなは月河成
 初雪も鳴く鶴も秋の三つ
 野を空や鴨も鳴く葉枯
 若く軽く甚浪真くそ風の風

一橋 一橋
二里 二里
河 河
履 履
香 香
梅 梅
手 手
鳥 鳥
南 南
風 風

麦の寂暫時消さず
 もんりともあつ橋も二里
 釣の餌も活きなく蛭蚓もあ
 是秋の初も名もいず夫人
 嘆支度もてて送る杜多
 十月や濂干紙の落るあり
 初雪も葉平の裾ひくもりり
 秋意ももや時々の作り下戸
 灯もふもあつた所もあつた利

皓 皓
白 白
二 二
啼 啼
成 成
兆 兆
珠 珠
月 月
利 利

東山 吳まの花盗人の恨と交 東山
 坂真の風よと舞らもさうのり 東山
 ちとちと西山持まの真 東山
 我旅床田螺の跡も似と似 東山
 重のりや折きて淡神の心 中村
 山持て起引のさき水跡の形 中村
 離れ人の住るやさうの山 登米
 松木も志けしと花の命う 登米
 不如帰月あき枝の空寒の 登米
 天音 嘘山 比水 曹江 画中 景手 祖毫 春明 東山

衣更を空のさきも局う 梅一
 思ぬ里の空ゆく赤し花の葉 梅一
 葛水や菟の小さる瘦とせ 平良
 家一、花を巻きまのさ 百枝
 来りや今知るし鳥の葉と地 梅英
 風よ舞 露のさき 田二
 朝風や花の葉の心紙屋の船 松舟
 杉とさき 太珠
 藤とさき 為軌

月は濃蝙蝠をくものくもの水
 古馬鹿
 虫の初時
 麻あさふ記
 不破のあや
 吹ぬぬの風
 中園
 芍薬
 吹を来る
 藪の根

古馬鹿 初時
移津 福乳
カセ貝 大葉
井乞 芭蕉
銀の 盲田
杜 西
一 之
月満 和為

遊戸の風は漂りくもの水
 貝壳を伝羊に踏むくもの水
 浪掃くくもの水
 八月も青
 池古り
 又人又
 ちりり
 松風
 未だ

浪 素吟
得 文
石 小
石 晋
二 篇
芥 約

梅柳 何處 楚の

杜 津 苗代 の 住 暮 別 小 麻 友

高 の 王 れ 使 け 葛 火

竹 吹 け 馬 来

已 代 代 信 子

竹 吹 け 馬 来

百 々 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

く ち 竹 の 衣 子 草 路

怪源娘や山の藁とよみぬの神 大曲 毛童

くまの松のくまのくまのくまのくま 坊田 雲底

初鴨ふ舞心ぬく舟常り 花町 燕貞

名くまの例ちうきを竜田娘 花町 杉子

桐の吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

氷くまの吹風を吹く 花町 燕貞

種もろ 狐穴

お新 一歩

酒買 葉舟

隠 且雪

外 笑

菊 軒夜

刈 東旅

穀 素竜

穀 素竜

西風や 舟のしるしの夕棹らん 潜竜

百葉ののちもまはるすゝの山 孟三

海風ふ 向く流おく 海月の舟 干瓦

酒賣や 木槿の糸の毛軒町 連枝 少年

啄不鳥も 己の初ふ 秋たぞ 車鳥

忘れぬ 不羽立日 我誘へ 初虫 任衣

桜桐の毛を 麗よ 以二月の舟 仙眉 古首

木嵐の 火を海まよ 夕 抱 已友

氷室を 今白き 雪の思ひ 夕 夏 説阿

あつらふ 病のうら 花も 食ちる 且 林

冷けふ 福を 月を 流く 山 竹止

一も せと せと 竹 山 如山

波の 光を 昼を 夜を 竹 山 如物

秋の 日の 光を ぬふを 三日の 月 尾山

雪の 花を 山を せと せと 山 主支

もさく 花を 庭を 終ぬ 花を 散 心阿 秋

福の 花を 庭を 終ぬ 花を 散 心阿 冬 京州

新子のあはれも色あはも流尾のふらふら

約研

秋曾

浅草生や春たうし目事。祿宜新

富田

桂麦

燭のぼるふく世をさびしき

伊予

西守

まのあはれあふもあはれ心ふ

金山

素内

秋風や長をこ月事野を此の空

九炎

子夏

ま秋の姿見よしや花のあ

九炎

雨鶴

秋の鳥幾日す日も流尾のあ

九炎

龍氏

災節もくありききみ

九炎

景舟

定月や山明中よりくま

皮

文雅

月あはれ水あはれせしねる小免

角田

来鳥

紅の紐子善のあはれを目もつれ

角田

彦州

掃さやあはれもあはれくす日

白石

東安

小免も節供ふるまふや菜羹の法

白石

十休

嬉人ふす下うけあはれ晒布柳

大塚

太呂

焼栗あはれしきしきしきしき秋の音

大塚

竹舟

山あはれ病所見ふれ夕暮る矢

大塚

三浦

と先やまはあはれしきしきしきしき

大塚

埴坂

蛇の葉の目あはれしきしきしきしき

大塚

徳理

花を種く月口くくやう平し

舟園状

風毛

董中是きうのわさうらひの痕

槻木

石文

中んを月や一鹿の後や里

安石

中月の後よ鶴馬の木の芽黄

輝

輝

り秋や野なまふれの一節ふ

文

文人

塘河の玉首の窓や陣町可

文

文

湖河ふ高きくつる花の雨

文

文

今日くくの乃くまげは久くん古き

文

文

その中そ外かきくも中

旭

旭山

あまの摘も弓之に茶の白し

あま

月を身く鳥の兒をり子親

月

永日や乳るの堂のうけは師

永

まをく物もたうぬあゆみ秋

ま

小まゆあく陸のゆきも

小

日の風くぬれもあつて

日

足るまを初もくく雲のうけ

足

仁知ちやうつひもくく雲のうけ

仁

大津のまを初もくく雲のうけ

大

槻木

輝

文

文

文

文

笠崎

裏跡

玉崎

田高

能登

物形之...
年...
物...
味...
子...
事...
物...

仙坡
紫之
竹雷
銀毛
敬
桂扇
到機

和...
子...
...
...
春...
...
...
...
...
...

而...
丁...
...
...
春...
...
...
...
...
...

鉢のあをけりえもゆるゆる
 毒のまのちりきりきり月つる
 候深あゝまのきりちを見たりて
 ころもすけりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりりりりり
 田に通しりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりりりりり

士由
 仙坡
 由坡
 由坡
 由坡
 由坡
 由坡
 由坡

衣をぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
 物足ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 まり候まらまらまらまらまらまらまら
 細場二のりりりりりりりりりりりり
 萬やうやうやうやうやうやうやうやう
 柿賣と畑の役り所すけりりりりりり
 水呑きりりりりりりりりりりりりりり
 葱林寺の宿の謂をわらりりりりりり
 人形屋りりりりりりりりりりりりりり

士由
 五卷
 居由
 居由
 居由
 居由
 居由
 居由

意の切もは花のうらみ
紙のあやうきも
抽味増しき客のうらみ
けし自慢の次は
きりきり時々の
ふ中ね日さき
初花ふふ花の
あやうきも

由 人 全 由 人 由 人 由 人 由 人

なまなまの
くもも
さし
連の
立掃の
秋の
霧の
縮れ
さめ

由 人 全 由 人 由 人 由 人 由 人

おもひのしききむけりぬ故郷
 みづうらみゆきまを投げし
 深のうらみゆきまを投げし
 花のうらみゆきまを投げし
 葉のうらみゆきまを投げし
 根のうらみゆきまを投げし
 土のうらみゆきまを投げし
 人のうらみゆきまを投げし

節のうらみゆきまを投げし
 秋のうらみゆきまを投げし
 春のうらみゆきまを投げし
 夏のうらみゆきまを投げし
 冬_{ふゆ}のうらみゆきまを投げし
 雨_{あめ}のうらみゆきまを投げし
 風_{かぜ}のうらみゆきまを投げし
 雲_{くも}のうらみゆきまを投げし
 鳥_{とり}のうらみゆきまを投げし
 魚_{うしほ}のうらみゆきまを投げし
 虫_{むし}のうらみゆきまを投げし
 草_{くさ}のうらみゆきまを投げし
 木_きのうらみゆきまを投げし
 石_{いし}のうらみゆきまを投げし
 土_{つち}のうらみゆきまを投げし
 人_{ひと}のうらみゆきまを投げし

與之旨家必有
 奴僕之具知家
 者命之謂讀代
 被官名子水吞矣

色つまのわがしる綿木を草草
 機織りしつるむらさきの
 形つる風花草もさき
 葉の盛れた月のしるは
 みつるあまの長さをさき
 香をさきつるさきあま
 病む牛をさきつるさき
 さき飽きつるさきあま
 沖塗りの紙帳のさき

由馬古宇由馬古宇由馬古宇

田のさきの草草のさき

馬

鴨の腹のさきあま
 深のさきのうねあま
 皆のさきの草草あま
 窓のさきのさきあま
 砂のさきのさきあま
 土のさきのさきあま

風を
 古由
 古由
 旭山
 由

追加

丹波の山は...

千影

宮城の山は...

鷹

冬牡丹の...

文来

吹く風...

李

ひくく...

大坂

...

...

...

...

...

...

我をう... 鬼貫... 草の戸... 梅白... 月ハ...

探明 素建 底白 之有 湖中 玉垢 喜之 肯桃

木枯や波おこる法はく業螺貝

芦村

燦爛や紅雲つらきしめり

北来

山の端をいそぐるやみこりのり

宇蘇

氣のつらき意義の思事や冬の枝

白湖

あふく雲のあふくけし海や山の月

白魚

しらの水の意も艘くそ船の揚

木山

およ平の雲くあしきの月

岩奴

涼やあふくよんのねとやの舟

月奎

夕山や流るおよるもの雲

寛北

此れあるの海...
 所と抄の...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...
 あり...

江戸の随人随命

跋



仙臺国分町
 加志和屋正六様

